

## 良きパートナークシップの確立を

教育学部長 那須俊夫

平成四年度の卒業生、修了生の皆さん、卒業・修了おめでとう。

皆さんが社会の担い手として真に活躍されるであろう二十一世紀は紛れもない国際化・情報化・高度科学技術化社会である。

国際化の時代を迎えて最も大切なことは、自分たちの考え方や風俗習慣を

絶対的なものと考えないこと、すなわち、異文化を互いに認め合うことであり、その上で良きパートナークシップを確立することである。しかし、このことは何も国際関係だけに限ったことではなく人間関係においても同様である。

現代は流動化社会とも言われ、いろいろな情報が氾濫し、人間の価値観も多様化している。また、高速化時代とも言われ、皆さんの仕事の内容もどんどん変化していく時代である。このような時代に生き活躍するには、自分の考えを周囲の人達に素直に理解してもらうと共に、自分と異なる価値観や知識・能力をもった人を理解し活かして、良き知的ネットワークを作る能力が新たに求められているのである。

しかし、このことは一朝一夕にできるものではない。いざという時に協力と協調が得られるように、平素から良き人間関係を確立して置くことが何よりも大切である。

「在平常」の気持ちを忘れず、卒業生・修了生の皆さんが、それぞれに良きパートナークシップを確立され、二十一世紀の社会で存分に活躍されることを祈る次第である。



## 「大学の常識」は「世間の非常識」(!?)

—謙虚に社会から学ぶ姿勢を—

学校教育学部長 西山啓

夏目漱石だったかの小説に、主人公が卒業式のあと、もらった卒業証書を筒にまぐるめ、外の景色を覗いたが、そこに映った景色は存外に狭かった……というくだりがあるが、なかなか含蓄のある記述ではないか。これは明治時代の話で「学士様ならお嫁にやるか……」と、大学出がもてもての頃の

話だ。然し漱石からすれば、「青二才め、大学を出た位でいい気になるな!世間もつと広く、分からねこと、学ぶことも沢山あるぞ!」との警句であろう。

私は、学生諸君が本学で学んだそれぞれの専門分野における知識に関して脱帽したい気持ちで一杯だが、それだけで慢心して呉れては困る、と言いたい。大学で学んだことは、これから社会人として大成するための必要条件ではあるが、決して十分な条件とは言えないからだ。

更に言えば、「大学で通用した常識は世間の非常識」であるかも知れぬ。ソクラテス流に言えば、「汝自身の社会的無知を知れ」というわけだ。

いま卒業証書。修士の学位記を手にする諸君よ、世間は広い、奥も深い、そして世の中には思わず頭(こうべ)を垂れ尊敬したくなる「人生の達人」もごまんといらつしやることを忘れるな。そんな人に早く出会い、何かを会得したとき、諸君が広大で学んだ知的所産は更にその光彩を放ってくるであろう。

今後の発展と多幸を祈る。

